# つながり、体験伝える

## 山元と大川小の遺族、初の交流

東日本大震災の津波で山元町の常磐山元自動車学校に通っていた長女薫さん（当時18歳）を亡くした早坂満さん（57）と妻由里子さん（55）＝亘理町＝が10日、児童74人が犠牲となった石巻市立大川小を訪れ、遺族と初めて交流した。震災から8年を迎え、強く感じるのは記憶の風化。「被災状況は違っても、遺族同士がつながることでもっと体験を発信できたら」と願う。【本橋敦子】

大川小を訪れ、子どもたちの冥福を祈ってシャボン玉を吹く（左から）鈴木実穂さん、美谷島邦子さん、早坂由里子さん、早坂満さん＝石巻市で、喜屋武真之介撮影

**東日本大震災8年**

柔らかな日差しが津波の爪痕が残る旧大川小校舎に降り注ぐ。「自分だけ置いてきぼりの気がしない？」「そう。私らだけ、震災は昨日のことのまま」。由里子さんの問いに、同小で長男堅登（けんと）さん（同12歳）を亡くし、長女巴（は）那（な）さん（同9歳）が行方不明の鈴木実穂さん（50）が応じた。

早坂さん夫妻は薫さんら教習生25人が死亡したのは自動車学校が安全配慮義務を怠ったためとして、遺族が同校側に損害賠償を求めた訴訟に参加。2016年5月、社長の陳謝などを条件に仙台高裁で和解した。その後は語り部活動などをしてきたが、時がたつほど震災の風化を感じ、危機感を強めてきた。

今回の交流は、各地の被災遺族とつながる美谷島邦子（みやじま）さん（72）＝東京都大田区＝の紹介で実現。1985年の日航ジャンボ機墜落事故で次男健さん（同9歳）を亡くした美谷島さんは、子を悼む思いを共有しようと毎年、被災地に足を運んでいる。

この日、早坂さん夫妻は旧大川小校舎前で鈴木さんらと共に、子どもを思いながらシャボン玉を飛ばした。鈴木さんは「シャボン玉が大好きだった巴那にも、お兄ちゃんにもきっと届いたと思う」とほほ笑んだ。

早坂さん夫妻は今後、各地の被災遺族と交流を広げていきたいという。「自分たちだけでは何もできない。津波で家族を亡くした同じ遺族として、大きなつながりを持って体験を伝えていきたい」